

万年筆の旅



吉村昭
記念文学館

準備室二ユース

vol.2

平成25年10月1日発行
登録番号(25)0047号
編集・発行/
荒川区教育委員会
問合せ/
荒川区教育委員会事務局
社会教育課文学館調査担当
〒116-8501
東京都荒川区荒川12-2-3
TEL.03-3802-4976

題字/津村節子氏
切絵/山崎達郎氏

天皇陛下が「吉村昭コーナー」
を行幸されました

平成25年(2013)6月11日、
天皇陛下は、「全国文学館協議会共
同展〈第10回「三陸沿岸大津波」
の壁〉(後改題「三陸沿岸大津波」
と「関東大震災」)を御覧になるた
め、日暮里図書館2階「吉村昭コー
ナー」へ行幸されました(関連記事2)



学芸員から説明をお受けになる天皇陛下
(左から津村節子氏、西川太一郎区長)

3画。

この展示は、全国文学館協議会(事
務局・日本近代文学館)加盟100館の
うち41館が、「文学は天災地変をい
かに表現してきたか」という共通テ
マのもと同時開催したものです。

吉村氏は、太宰治賞を受賞した「星
への旅」の舞台地、岩手県下閉伊郡
田野畑村で住民から津波の体験を聞
きます。そして、丹念な取材・現地
調査に基づき「海の壁 三陸沿岸大
津波」(中央公論社、昭和45年)を発表、
後に「三陸沿岸大津波」(中央公論社、
昭和59年)と改題し、津波の被害や人
びとの思いを伝えました。

また、関東大震災を体験した両親
の話を読み、火災被害や防災への関
心を深めました。昭和48年に刊行さ
れた「関東大震災」(文藝春秋)では、
被害の要因や災害時の人間心理を検
証しています。

夫人の津村節子氏は、東日本大震
災後、ゆかりのある三陸各地や宮古
市田老の防潮堤、田野畑村の仮設団
地を訪問しました。著作「三陸の海」
(「群像」第67巻第11号〜第68巻第6号、講談

社、平成24年11月〜平成25年6月連載)には
被災地の状況とともに、吉村一家が三
陸地域で深めた温かく健やかな交流
が綴られ、三陸地域に対する住民の
感慨と、吉村氏津村氏の思いが共鳴
しています。

本展では、「関東大震災」に関す
る直筆メモや講演録、執筆時の参考
資料、関連書籍を中心に三陸沿岸を
舞台とした作品、執筆における信念
を紹介しました。

天皇陛下は、展示を御覧になり、
「これからの災害に対して、こうい
うものを皆が目を通すのは大切です
ね」とお話になりました。

また、西川太一郎区長、志村博司
区議会議員、津村節子氏と災害を語
り継ぐことの重要性についてご懇談
されました。

(仮称)吉村昭記念文学館は
平成28年度に開設の予定です

(仮称)吉村昭記念文学館は、現
在設計が進められている、(仮称)
荒川二丁目複合施設の中に整備され

ます。

この施設は、図書館、吉村昭記念
文学館、子ども施設の各機能が融合
した、あらゆる世代が活用できる施
設です。

文学館には、吉村昭氏の書齋を再
現し、文学館と図書館を一体化するこ
とによって、作品執筆の臨場感を味
わえ、広範な文学に自然に触れあえ
る空間を目指します。



複合施設外観イメージ図

展示報告
全国文学館協議会共同展
〈第10回ミニ企画展吉村昭『海の壁』
（後改題『三陸海岸大津波』）と『関東大震災』
会期／平成25年2月22日～7月17日

日暮里図書館2階「吉村昭コーナー」では、定期的ミニ企画展を開催しています。今回は、第10回ミニ企画展について紹介します。

綿密な証言収集や資料調査による作品で知られる吉村昭は、昭和45年（1970）、明治、昭和の三陸地震津波、チリ地震津波に関する『海の壁 三陸沿岸大津波』（中央公論社）を発表しました。昭和59年『三陸海岸大津波』（中央公論社）と改題し、平成16年（2004）に再び文庫化（文藝春秋）されています。また、昭和47年には「関東大震災」（『諸君！』4巻5号～5巻6号、文藝春秋、昭和47年5月～昭和48年6月連載）を執筆、自然災害に向き合う人びとの姿と災害の実態に迫りました。

〈三陸地方との縁〉

『三陸海岸大津波』には、明治29年（1896）、昭和8年の三陸大津波、そして昭和35年のチリ地震津波の前兆、被害、予知、防災、体験者の証言などが克明に綴られています（写真1、2）。

岩手県の三陸沿岸を歩く度に、私は、海らしい海を



写真1
 『海の壁 三陸沿岸大津波』（中央公論社、昭和45年）



写真2
 『三陸海岸大津波』（中央公論社、昭和59年）（上）
 『三陸海岸大津波』（文藝春秋、平成16年）（下）

みる。屹立した断崖、その下に深々と海の色をたたえた淵。海岸線に軒をつらねる潮風にさらされたような漁師の家々。それらは、私の眼にまぎれもない海の光景として映じるのだ。
 （『三陸海岸大津波』文藝春秋、平成16年）

吉村と三陸地方の出会い、昭和36年に遡ります。友人に勧められ、岩手県下閉伊郡田野畑村を訪れた際に、リアス式海岸特有の険しくも豊かな海を体感し魅せられました。

その体験に着想を得て同地を舞台に執筆した「星への旅」（『展望』第92号、筑摩書房、昭和41年8月）は、第2回太宰治賞を受賞します。作家の出发点ともなった三陸沿岸は、その感性を刺激し、以後、毎年のように訪れました。

〈明治29年・昭和8年の三陸津波〉

やがて、吉村は、村民から津波の体験談を聞き、巨大な防潮堤から感じた海の恐怖に触発され、自ら三陸沿岸を歩き、地道な体験者への取材や資料調査を行いました。「二つの地方史として残しておきたい気持ちにもなった」という、まえがきの一文には吉村の心情が察せられます。

「津波・海嘯・よだ」の意味と、津波襲来状況の関係性を調査し、田野畑村羅賀では、明治29年の津波体験者から、公式記録と異なる高さ50メートルもの津波が発生したとの証言を得ます。当時の科学的説明の不十分さや、複雑な地形が波高測定を困難にする要因である

と指摘しました。

さらに、調査を進める中、今後の警鐘のために発行された『田老村津浪誌』（田老尋常高等小学校編、昭和9年）の存在を突き止め、「挿話・児童文」として収録された田老尋常高等小学校の生徒による作文に焦点を当てました。土地のことばで語りかける子供たちの率直な筆致は、被災地の真情を伝えています。吉村は、同資料を「貴重な記録」であり「鎮魂文」でもあると記しました。

そこには、災害の事実を著すことへの意識が垣間見られ、事実そのものに向き合う吉村の信念が窺えます。

〈郷土資料の調査―チリ地震津波と防災〉

吉村は「津波は、自然現象である。ということ、今後も果てしなく繰り返されることを意味している」として、被災地の実情を反映した郷土資料を徹底調査しました。講演「三陸大津波―災害と日本人―」では、防災、減災についての見解を示しています（写真3）。

「のっこ、のっこやって来た」との証言が残るチリ地震津波は、南米チリで発生した地震によるため、「波長がきわめて長い」という特徴をもちます。『災害と教育』チリ津波は何を教えたか（岩手県教員組合編、昭和35年）に取められた小中学生の作文には、津波到達までの行動や、地震を感知せずとも津波に遭遇した衝撃が書き留



写真3 第12回三陸地域づくり講座 基調講演「三陸大津波―災害と日本人―」（平成11年、田野畑村ホテル羅賀荘にて）（〔SANRIKU ALL Right（おーらーい）〕三陸国道工事事務所、平成13年）

られています。家族や友人との会話は、子供たちが生きて日常を物語っています。

吉村は、これらの調査資料から、チリ地震津波が三陸沿岸の住民にとり「誠に奇怪な津波」となった要因、対策を検証しました。一方、「1.津波と田老」「2.防災と田老」「3.訓練と田老」の三章から成る『津浪と防災』（田老町役場総務課、昭和35年）では、遠方で発生した地震と、三陸沿岸の津波に関する論述に着目し、予知の可能性を示唆しています。

このように、吉村は、三陸地域をはじめ各地に息づく貴重な証言や資料、記録を多角的に調査、客観的視点により『三陸海岸大津波』を執筆しました。それ故に、その筆致からは、三陸の海と大地、人びとに訪れた歲月の重み、語られない思いまでもが想起されます。

〈関東大震災の記憶と時代〉

激しく大地がゆれた時、父は道を歩いていた。電柱が左右に振子のように傾き、屋根瓦が路上に音をたてて一斉に落ちて土埃で茶色く煙った。

（其ノ十五 説教強盗その他『東京の下町』文藝春秋、平成元年）

吉村は幼時の頃、日暮里町（現荒川区東日暮里五丁目）で関東大震災に遭った両親の話を聞き、防災について学ぶ一方、災害時における人心の乱れに関心を寄せま



写真4 『関東大震災』（上）と『三陸海岸大津波』（下）に関する取材ノート

した。震災時、食料難のため被災地では「スイトンを常食」としたことから、吉村家では大震災が発生した9月1日の夕食を必ず「スイトン」にしました。それが「家の行事」でもあり、両親は、「大地震の記憶を新たにするため家族にスイトンを食べさせた」といいます（『関東大震災』ノート「赤い鯉のぼり」『万年筆の旅（作家のノートII）』文藝春秋、昭和61年）。



写真5 直筆メモ「関東大震災」

時間の経過は、記憶の風化を招きます。「記憶を新たにすると」という両親の教えは、『関東大震災』に通底し、資料収集や体験者との面会を重ね、その詳細を取材ノートに書き留めました（写真4）。メモには「あくまで素人、取材して歩きまわった」と残しています（写真5）。そして、本所被服廠跡や吉原公園を中心に、甚大な火災被害、要因、避難状況の詳細を明らかにしました。

さらに、「流言」が引き起こす犯罪などの社会事件に迫ります。その「悲劇」は、明治維新後、「大正時代後期に至って加速度的に蓄積されていた様々な矛盾」が、「大災害によって」拳に露呈したもので、関東大震災は「歴史の意味をもつ災害」（『関東大震災』ノート 二）その歴史の意味『万年筆の旅（作家のノートII）』であると論じました。自然災害や非常事態に直面し問われる人間の本质、浮き彫りとなった社会問題を追究した本書は、第21回菊池寛賞を受賞しました。

〈東日本大震災後の吉村作品再読〉

平成16年、吉村は、「関東大震災が語るもの」（日本

災害情報学会創立5周年記念シンポジウム、平成16年）と題し、江戸時代から教訓とされる災害時の道路確保について講演しました。「被害広げた「大八車」（『縁起のいい客』文藝春秋、平成18年）においても火災被害拡大の要因を詳細に述べています。

また、阪神淡路大震災に言及した「歴史はくり返す―阪神大震災に寄せて」（文藝春秋編『吉村昭が伝えたかったこと』文藝春秋、平成25年）では、今後の多様化する社会に備え、災害時の発火要因を究明する必要性を説き、先人の警鐘に耳を傾ける重要性を幾度も語りました。

吉村は、津波の歴史を知ったことで、「二層三陸海岸」に対する愛着を深めている」と記しました。平成23年3月11日、未曾有の災害である東日本大震災が発生し、その後、自然災害に関する吉村作品は注目を集めています（写真6）。

それは、災害・防災の実態や課題を検証し継承することに通じます。また、自然とともに歩み続けた先人の姿、日常を偲ぶことでもあり、その機微に思いを巡らすことは読者の指標となるでしょう。本年は、関東大震災から90年、昭和三陸大津波から80年が経過し、改めて災害の状況や復興、防災対策が見直されています。

自然と人間との共存の歴史を記した吉村作品は、後世への教訓に満ちています。

〈文学館調査担当学芸員 深見美希〉



写真6 文藝春秋編『吉村昭が伝えたかったこと』（文藝春秋、平成25年）

著作紹介
第1回

『星への旅』



『星への旅』
(新潮社、昭和49年8月)

視野が広くひらけていて、起伏しながら傾斜している丘陵の背の下方に、紺青色の水のひろがりが見える。その海の色は、夏の陽光をまばゆく反射し、水平線に量感をはらんでふくれ上つてみえた。
 (『星への旅』新潮社、昭和49年)

「日常の物憂い倦怠感」から、死への「旅立ち」を企てた、圭一、三宅、槇子、有吉、望月ら若者たち。彼らは北国の海辺を目指しトラックを走らせます。若さゆえの意地や虚栄から互いに本心も語らず、死への意味も見出せぬまま、ついに断崖に立つ顛末が海や星空、漁村の光景を舞台に描かれています。

都会生活の中、若者たちが将来に光を見出せずに抱く「倦怠感」は、「生きることに飽きた」という無動機とも言える死に結びつきました。しかし、圭一は、漁村の厳しい生活を目の当たりにしたことで、「過剰なほど満たさ

れている結果」に自身の「平穏な倦怠感」があり、その延長に死を求めていることを初めて意識するのです。

本作には、さまざまな「光」が登場します。列車の光、夕空のネオン、模型に灯る電灯、焚き火の炎、漁火、星の冴えた光。その明滅は、圭一らの曖昧で漠然とした死の観念、心の空虚さを際立たせます。星空の下で「夜空に散つた星」が、「すべて死者の化身」であるという祖母の語りを思い出し自問自答する場面は、星の光と夜の海、都会と漁村、自然と人間、生と死などの相対的な世界が立ち上り、深い余韻を残します。

吉村は、昭和33年(1958)から37年にかけて4度の芥川賞候補になるも受賞に至らず、多忙な会社勤めの日々を始めます。その頃、友人の勧めから岩手県下閉伊郡田野畑村島越を訪れ、断崖に腹這いになり、海の息吹と自然環境に魅せられ執筆を決意します。舞台地である三陸の地形や風光を詳細に活かし、本作を構想、昭和41年8月、『展望』第92号(筑摩書



田野畑村 屹立する断崖と海



写真1
田野畑村名誉村民となる(平成2年、田野畑101年祭記念式典にて)

房)に発表し、第2回太宰治賞を受賞しました。以後、夏になると家族を伴い、毎年のように同地を訪れ深い縁を結びます。それは、平成2年(1990)に田野畑村名誉村民となり【写真1】、平成8年には、『星への旅』の文学碑が同地に建立されたことにも明らかです。

さて、本作の一方で、戦艦「武蔵」建造の技師や関係者への取材・調査を進め、「戦艦「武蔵」取材日記」(『プロモート』20、24号、日本工房、昭和41年3月)昭和42年5月連載)を連載、「初めて事実にも即したものを書くことに奮闘します。それは、戦史小説の新境地を切り拓く『戦艦武蔵』(新潮社、昭和41年)へと結実し、ベストセラーとなりました。

本作以後、『海の奇蹟』(文藝春秋、昭和43年)や歴史小説など三陸を舞台とした小説を創作、『戦艦武蔵』以後は、『高熱隧道』(新潮社、昭和42年)をはじめ徹底した証言収集・文献調査に基づく作品を続々と発表します。

昭和41年の執筆活動は、作家として飛躍する契機となりました。
 (文学館調査担当学芸員 深見美希)

訃報

大河内昭爾氏

(武蔵野大学名誉教授)

故吉村昭氏の友人であり、多くの吉村作品の解説を手掛けられた文芸評論家である大河内昭爾氏が、平成25年8月15日、逝去されました。

平成19年1月、大河内氏には、津川区で開催した「作家吉村昭氏を偲ぶ講演と鼎談」吉村昭を語る」において、お話をいただきました。また、(仮称)吉村昭記念文学館の設立に向けて、「文学館のあり方に関する懇談会」、「(仮称)吉村昭記念文学館基本構想委員会」、「文学館推進委員会」の委員を歴任し、貴重なご意見・ご助言をいただきました。
 大河内氏の生前のご協力に心から感謝申し上げます。ここに謹んで、ご冥福をお祈りいたします。

お知らせ

日暮里図書館2階
吉村昭コーナー
第12回ミニ企画展

映画・ドラマ化された吉村作品をテーマに平成25年10月18日(金)から平成26年2月19日(水)まで開催します。皆様のお越しをお待ちしています。